

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目	制御焦点が社会的交換に及ぼす影響
------	------------------

氏 名	佐藤 有紀
-----	-------

論 文 内 容 の 要 旨

集団内成員の助け合い、すなわち協力は、職場組織の発展 (e.g., Cohen & Prusak, 2001) や地域の福利厚生 (Coleman, 1988; Putnam, 2000) など、様々な文脈において重要である。こうした人々のつながりが個人や集団にもたらす利益は、社会関係資本 (social capital) と呼ばれ、近年重要視されている。個々人は、こうしたつながりを通して、情報や物資を他者と交換し、双方の利益を最大化しているのである。

本研究では、個人が他者に協力し、また他者から返報を受けるという、社会的交換を規定する個人内の要因について検討する。社会的交換は、二者が協力すれば全体の利益の総和を最大化できるが、一方が裏切れば他方の個人は搾取されるという、社会的ジレンマの構造を含む。つまり個人は、他者に協力するコスト、被搾取のリスク、そして相互協力によってもたらされる利益を総合的に考慮し、他者に協力するか否かを決定する必要がある。社会的交換状況において、どのような情報に敏感になり、どのような戦略を選択するかは、行為者の自己制御の指針である制御焦点 (regulatory focus; Higgins, 1997, 1998) が影響を与えると考えられる。そこで本研究では、行為者の自己制御の指針が社会的相互作用における戦略を決定するという観点から、制御焦点が社会的交換に影響を及ぼす可能性を検討する。

Higgins (1997, 1998) は、個人の自己制御の指針として、従来提唱されてきた快への接近と不快の回避という軸とともに、個人が志向する望ましい最終状態のタイプの違いによる軸が存在するとし、制御焦点理論 (regulatory focus theory) を提唱した。制御焦点理論において、ポジティブな結果や利益の有無に基づく自己制御は促進焦点 (promotion focus)、ネガティブな結果や損失の有無に基づく自己制御は予防焦点 (prevention focus) と呼ばれる。促進焦点は、利益の見逃しを防ぐためにリスクな意思決定を行う熱望方略を駆動し、予防焦点は、慎重な意思決定で損失を確実に防ぐ警戒方略を駆動する (Crowe & Higgins, 1997)。

先述のような社会的交換の構造を考慮すると、予防焦点の優勢な個人にとって、社会的交換における警戒方略とは、非搾取のリスクを抑えるために協力を控えることであると考えられる。一方、促進焦点の優勢な個人にとって、社会的交換における熱望方略は、得られる可能性のある新しい資源を追求し、リスクを取って積極的に他者協力を行うことであると考えられる。本研究では、社会的交換状況において促進焦点は協力を促進し、予防焦点は協力を抑制すると予測し、行為者の制御焦点が社会的交換に及ぼす影響のプロセスを明らかにする。

研究1では、利得構造を参加者に明示した「囚人のジレンマ」課題を用い、参加者の制御焦点が協力への選好に与える影響を検討した。実験の結果、予防焦点を喚起された予防焦点群は、促進焦点を喚起された促進焦点群や統制群と比べ、相手の選択に関わらず一貫して非協力を行うという、利己的な戦略を取る傾向があることが明らかとなった。研究2では、シナリオ実験を用いて、個人の制御焦点が集団内の不遇な他者に対する寄付（向社会的行動）の意思決定に与える影響を検討した。その結果、促進焦点群は、予防焦点群と比べ、不遇な他者への寄付額を高く提示し、寄付相手や第三者から多くの返報を受けることを期待する傾向があることが示された。研究3では、企業に勤める社会人を対象にした調査を行い、従業員の特性的制御焦点が、職場での他者援助と返報への期待に及ぼす影響を検討した。分析の結果、従業員の促進焦点は直接的に職場での他者援助を促進し、予防焦点は直接的に他者援助を抑制していた。これらの影響は、返報への期待を媒介していなかった。研究4では、企業組織における目標管理制度を援用し、目標遂行への報酬認知（促進焦点的動機づけ）と目標達成へのプレッシャー（予防焦点的動機づけ）が、成果査定に関与しない目標外職務（e.g., 組織市民行動）の遂行に及ぼす影響を検討した。その結果、報酬認知は目標外職務へのエンジョイメントを媒介して、目標外職務の主観的遂行度を増大させていた。一方、プレッシャーは、目標外職務への（時間的・体力的）資源の圧迫を媒介して、目標外職務の遂行時間割合を減少させていた。

以上の結果から、促進焦点は他者への協力を促進する効果がみられた。また、促進焦点が駆動する協力は、返報への期待を媒介していないことが明らかとなった。したがって、促進焦点は協力を促進するが、具体的な利得計算に基づいた協力を駆動するわけではなく、ヒューリスティクスに基づく直感的な意思決定を行っている可能性が高いことが示唆された。一方、予防焦点は一貫して他者協力を抑制する効果がみられた。また、この効果は、予防焦点が返報に対する期待を低減させることに由来するのではなく、協力時に自身が負うコストを抑制するという指針に由来することが示唆された。本研究は、制御焦点が社会的交換に与える影響とその認知的プロセスを明らかにし、特に産業組織における従業員個人の動機づけと協力関係の醸成の両立の問題（Rob & Zemsky, 2002）について解決の糸口を提供するという、応用的な意義を持つと考えられる。